

バイオオマース導入を拡大

包材・インキ向けなど 新ニーズに照準

大成ファイナ



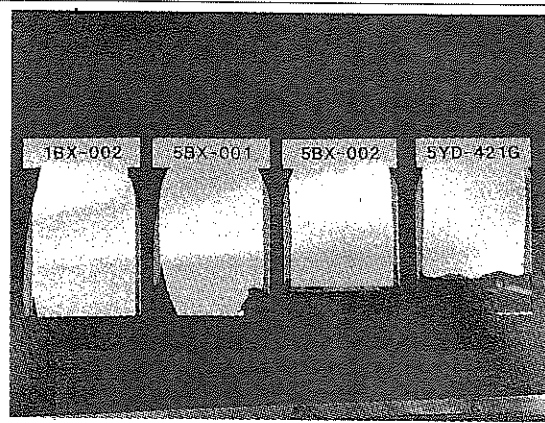
稲生社長

樹脂メーカーの大成ファイナケミカル(千葉県旭市、稲生豊人社長)は、インキ・コーティング向けのアクリル系製品を中心にバイオオマース導入品を大幅に拡充した。バイオオマース度50〜60%品を揃え、2025年までに年間250ト規模の販売を計画。主戦場とみる包材市場では、マテリアルサイクル(MR)に対応する脱墨インキ向けなどの新規ニーズを有力視する。また電機・電子業界でも製造プロセス全体を通じた温室効果ガス(GHG)排出量の低減が求められ始めていることから、コーティング剤にもバイオオマース導入のニーズが波及するとみて採用を狙う。

インキ・コーティングのバインダー樹脂などとして多用される「アクリット」ブランドで高バイ

オマース品を拡充する製品戦略をとる。21年からケラレインキ用の油性アクリル樹脂「同 1BX」シリーズなど製品4品番を展開してきたが、22年末に6製品13品番へと大きく拡充。高酸価型の油性品や紫外線(UV)硬化型のウレタンアクリレートなどをラインアップに加え、このほど本格展開を始めた。

従来のバイオオマース導入では、フィルム向けに必須のアンチプロッキング性のほかアルコール溶解性といった物性の低下が課題だった。非可食原料やパーム油の「使いこなし」で実験データの蓄積が進み、樹脂設計技術が向上。飲料向けシュリンクフィルムや食品・化粧品など容器類向けのインキ・ニスに加え、建材用



アクリット 5BXシリーズをバインダーに用いた白インキを塗工した試験片(中央の2つ)。アルカリ溶解が確認できる

億円の売上高を目指す」(稲生豊人社長)計画とする。包材市場では二酸化炭素(CO₂)などGHG排出量の低減に限らず「MR適性」との掛け合わせが新規ニーズとなりそうだ。主な顧客となるインキメーカーは近年、ブランドオーナーらとの連携を通じて軟包装MRの早期実装を模索。一定濃度のアルカリ水溶液で除去できるインキをMRシステムに組み込む方式などが検討されている。

新開発の高酸価型アクリル樹脂「同 5BX」シリーズはアルカリ可溶性を持つことから、脱墨インキのバインダー樹脂としての利用が有力。一般にグラビティンキ用バインダーは油性ウレタン系が多いが、樹脂系の転換を含めて提案していく。もう一つ新たな動きがあるのはエレクトロニック市場だ。末端部材を含む製造プロセス全体でGHG排出量の削減が求められ、例えばディスプレイでは、プロテクトフィルムなどにPETやポリカーボネートへのバイオオマース導入が試験段階に入ったもよう。

大成ファイナは「基材と組み合わせるハードコート剤にもニーズが波及する」とみて、UV硬化型製品を提案。基材密着性にすぐれるウレタンアクリレート「同 8UX」など2品種を中心に採用獲得を狙う。これらバイオオマース製品群の一部はコンパターでのラインテストに移行。用途分野によっては「構成部材の一角としてカーボンフットプリントの算出が急がれる」として、検討課題をクリアしていく考えだ。